

# 教育の機会均等と予約採用の効用

藤村 正司  
(新潟大学教授)

これまで我が国の高等教育機会の均等政策において、授業料や入学定員については様々な議論と実証研究が蓄積されてきたが、奨学金が大学進学に及ぼす効用については経験的知見に乏しい。本稿では、予約採用制度に注目することで、(一)誰が予約採用に申込み、採用されているのか、(二)予約採用は大学進学へのインセンティブになっているのか、(三)予約採用は学生生活にどのような影響をもたらしているのか、検証してみたいと思う。

用いるデータは、平成一七年一月に東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターが全国四〇〇〇人(男女各二〇〇〇名)の高校三年生とその保護者を対象に

実施した「高校生の進路についての調査」(代表・金子元久)である。本調査では、高校生の希望する進路や独立行政法人日本学生支援機構(以下「機構」)の奨学金予約採用状況、家庭環境などを聞いている。この調査は、二〇〇六年三月(第二回)と同年一月(第三回)に追跡調査が実施され、引き続きパネル調査が実施される予定である。

## 一 誰が予約採用に申し込んだのか？

まず、第一種と第二種の予約採用にどのような高校生が申請し、採用されたのかみておこう。<sup>①</sup>「高校生進路調査」

から一種・二種にかかわらず予約申請をしたのは、全体の一五%である(応募しなかった六〇・四%、知らなかった二四・六%)。表1は、予約奨学金の応募・採用状況に与える要因の推計値を示したものである。参考までに、第三回追跡調査から在学採用者の推計値も掲載しておいた。

モデルには、性、きょうだい数、高校の成績、両親年収(単位:百万円)の基本変数の他、母親の就業状況と本人の生順を投入した。表1では予約申請の有無に対して、きょうだい数と高校の成績がプラス、両親年収がマイナスとなり、予想される結果を示している。さらに、年収などを一定としても母親が無職(専業主婦)であること、遅く生まれた子どもほど申請しにくいことがわかる。母親が無職であることは高所得層の可能性が高いことと、あるいは無職ゆえのローン回避の解釈が成り立つ。女子の場合、予約採用への申請のしやすさは長子と比べて、第二子が六二% $(e^{0.418} = 0.62)$ 、第三子以下では四一% $(e^{0.418} = 0.41)$ まで減少する。親は、現実的にローンを抱えることの不利を、第三子以下の女子で大きいと判断しているのである。

次いで、採用状況を奨学金の種類別にみると、当然、無利子の第一種で基準が厳しくなって高校の成績と両親年収の効果が大きくなっている。さらに、第一種ではきょうだい

表1 予約奨学金の応募・採用状況のロジスティック回帰分析(b)

	応募した		採用された		(参考)	
	全体	男子	女子	第一種	第二種	在学採用
女子	0.136			-0.057	0.174	-0.051
きょうだい数	0.160 *	0.061	0.250 *	0.600 ***	0.046	0.445 ***
高校成績	0.307 ***	0.250 ***	0.363 ***	0.527 ***	0.196 ***	0.067
両親年収	-0.157 ***	-0.149 ***	-0.166 ***	-0.288 ***	-0.128 ***	-0.178 ***
母親無職	-0.530 ***	-0.423 *	-0.633 **	-0.523 +	-0.454 **	-0.637 **
第二子	-0.385 ***	-0.267 +	-0.481 **	-0.556 *	-0.267 *	0.001
第三子以下	-0.510 **	-0.106	-0.885 ***	-0.803 *	-0.333 +	-0.545 *
定数	-1.776 ***	-1.498 ***	-1.904 ***	-4.521 ***	-1.828 ***	-1.144 **
疑似R2	0.093	0.068	0.121	0.143	0.050	0.094
-2LL	2,797	1,352	1,437	827	2,278	1,129
N	3,579	1,783	1,796	3,579	3,579	1,283
応募・採用率	14.7	13.6	15.8	3.0	10.3	17.8

有意水準: +p<10%, \*p<5%, \*\*p<1%, \*\*\*p<0.1% 在学採用は、予約採用者を除く。生順の基準は、長子。

い数の影響が採用に効いている。申請者に占める採択率は、第一種で三四%、有利子の第二種は九六%。第二種予約採用については、申請すればほぼ採択されている通りである。在学採用(機構以外の奨学金受給も含まれる)の有無をみると、高校の成績を別にして予想される結果を示している。

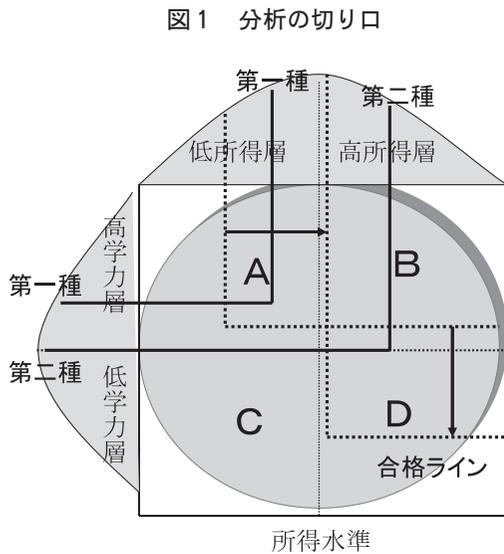
このように予約奨学金に応募する者は、年収と学力について予約採用状況ともに推薦基準から自明な結果を示している。

しかし、奨学金がローンである以上、家族の状況によって申請状況は異なっている。きょうだい数が同じでも、遅く生まれた子どもはローンに対する忌避の傾向が強い。奨学金は本人が卒業後に返済すべきといっても、親は将来の不安を考慮しているのである。予約採用をめぐって、親の願いⅡ「感情」とリスク回避Ⅱ「勘定」の相反する判断が働いているのである。

二 予約採用の大学進学底上げ効果

一般に、授業料の価格水準は大学進学の意志決定に重大な影響を及ぼすが、奨学金は入学後に受給が始まるものだから、進学の意味決定に無関係のはずである。だが、入学前に、入学後の受給があとにできるならば、これが進学の意味決定の誘因になっているとみることが可能。ところで、アメリカの先行研究では、給付制奨学金は大学進学の決定に有意な効果が認められているが、貸与奨学金の進学決定への効果はみられない。

しかし、図1にみるように、一八歳人口の減少による合格率の上昇と授業料の高騰による家計負担上昇のトレンド（波線）は、【高学力・低所得層】の進学機会を困難にし、



【低学力・高所得層】の進学を有利にさせる（矢野眞和『高等教育の経済分析と政策』参照）。つまり、家計負担の上昇は進学を制約する所得水準のフロンティアを右にシフトさせ、大学全入の趨勢は学力水準のフロンティアを下にシフトさせる。そうだとすれば、現在、大学進学をためらっているのは、大学に進学できる学力がなりながら、経済的理由

表2 所得階層別にみた大学志願の影響要因(b)

	低所得	中所得	高所得
女子	-1.170 ***	-1.415 ***	-1.296 ***
きょうだい数	-0.125	-0.290 *	-0.373 ***
高3成績	0.252 ***	0.338 ***	0.278 ***
進学希望者率	0.043 ***	0.040 ***	0.044 ***
父教育年数	0.168 ***	0.149 ***	0.249 ***
予約採用	1.069 ***	0.450 +	0.335
定数	-5.485 ***	-4.240 ***	-5.386 ***
疑似R2乗	0.410	0.408	0.399
-2LL	1,242	898	1,292
N	1,230	906	1,441
採用率(%)	17.6	13.0	7.8

注：予約採用は、第一種・第二種、ロジスティック回帰  
低所得<600万円, 600≦中所得<900万円, 高所得≧900万円

で進学できない【高学力・低所得層】である。この【高学力・低所得層】の進学機会をいかに保証するかが、大学全入時代の奨学金政策の課題である。貸与奨学金がこの課題に込んでいるのか予約採用によって検証してみよう。  
表2は、性、きょうだい数、高校三年次の成績、クラスの大学・短大進学率、父親の教育年数を一定とした場合の、予約採用（第一種・第二種採用者）が大学志望に与える効果を所得階層別に示したものである。これによって予約採用は、低所得層で大学進学の意味決定に効果を及ぼしていることがわかる。低所得層では、予約採用された者は、採用されなかった者より三倍近く（ $e^{1.069} = 2.9$ ）志願しやすくなっているのである。むろん、同じ所得

表3 大学予約奨学金の大学志望底上げ効果

	高3の一学期成績				
	下の方	中の下	中くらい	中の上	上の方
低所得	0.257	0.308	0.364	0.425	0.487
中所得	0.427	0.511	0.594	0.672	0.742
高所得	0.620	0.683	0.740	0.790	0.833

	高3の一学期成績				
	下の方	中の下	中くらい	中の上	上の方
低所得	+24.5	+25.7	+26.1	+25.7	+24.8
中所得	+11.2	+11.0	+10.3	+9.1	+7.7
高所得	+7.5	+6.8	+5.9	+5.0	+4.1

階層でも学力水準によって大学予約の効果は異なっている。表3は、表2の係数と説明変数の平均値を用いて、大学予約の効果と学力水準別にシミュレートしたものである。上段は大学予約が採用されない場合の志望率の推定値を、下段は予約採用された場合の程度大学志望率を高めるのか、その限界効果（確率の増分）を示している。大学予約は、なるほど低所得層で「底上げ効果」がみられるが、それは「学力中」で最も効果的である。学力が高くなるにつれて「天上効果」が現れる。「低所得・学力中」層が、公的補助に敏感に反応しているのである。低所得層の進学確率が高まれば、大学進学に伴う所得間格差が是正されることは言うまでもない。

三 予約採用が学生生活に及ぼす影響

奨学金の本来の趣旨は、入学後の学生生活に対する経済的援助である。最後に、予約採用が大学入学後の生活意識にどのような効果をもたらしているのか、一年後に実施された第三回追跡調査（二〇〇六年一月現在）を用いて検討しておく。表4は、「高校のときの進路選択に満足している」（四件法）を従属変数とした順序回帰分析の結果である。モデル一は、性、前期成績「優」の割合、いま通っている大学が第一志望、一ヶ月の平均収入の内訳（有無）を、モデル二は平均収入の金額を投入した。さらに、奨学金は「予約採用」の効果をみるために、入学後に受給する「在学予約」と区分しておいた。

表4から、第一志望であることが何よりも充実した学生生活を過ごせる条件に違いないが、学業成績が自己評価に効いていることは重要である。しかし、志望順位や学業成績を一定としても、一ヶ月の平均収入の内訳（親からの仕送り・こづかい、アルバイト収入、奨学金）のなかで奨学金を受給していること、とくに「予約採用」が「在学採用」よりも非受給者に比べて満足度を高めていることがわかる。

る。

第一は、予約採用への需要側の問題は、低所得層がこれを忌避するというよりも、女子の場合にきょうだいの生順によってリスクを負うことへの忌避が生じていることである。このことが奨学金の効用を阻害していると同時に、男子に比べた女子の大学進学率の低さの要因の一つになっている。第三子以下の娘を大学に進学させようと思えば、爪に火をともしつつ一八年間貯蓄するしかない。

第二は、大学予約が大学進学へのインセンティブになっていることである。たとえ有利子・貸与でも、後先考えず奨学金を必要とする層が存在するからである。実際、貸与奨学金は低所得層において大学志望の予想確率を高める。予約制度のねらいがもたら大学進学を底上げすることにあるとすれば、「低所得・学力中」の高校生に貸与するので効果的である。高所得層は学力に関係なく、ともかく進学するから奨学金を貸与しても「贈与」でしかない。第三は、進路選択の自己評価は予約採用で満足度が大きいこと、アルバイト収入の多い学生の満足度は低いということである。

以上から、予約採用の効用は両義的である。予約採用はたしかに低所得層の高等教育機会を保証し、大学入学後の

表4 高校の時の進路選択に満足している

	Model 1	Model 2
女子	0.093	0.103
「優」の割合	0.077 ***	0.074 **
第1志望	1.371 ***	1.367 ***
< 1ヶ月の平均収入 >		
(1) 仕送りなど有り	0.074	
(2) アルバイト有り	-0.094	
(3) 奨学金有り		
予約採用	0.526 **	
在学採用	0.310 *	
(1) 仕送りなど(万円)		0.011
(2) アルバイト(万円)		-0.052 **
(3) 奨学金(万円)		0.067 ***
疑似R <sub>2</sub> 乗	0.135	0.141
-2LL	2,118	1,415
N	1,180	1,162

順序回帰  
4件法：とても当てはまる = 4 ~ 全く当てはまらない = 1  
アルバイト収入月15万以上、奨学金12万円以上は除外

高校時代の進路選択を振り返って、予約採用が安心感を与えているからである。具体的に平均収入をみると、アルバイト収入の多い学生は進路選択に現在不満を抱いていること、奨学金は使途が何であれ受給額の多い学生ほど進路選択の満足度が高くなる傾向にある。

以上、この小論では、高等教育の機会均等をめぐって予約採用の需要と効用について経験的データを示しておいた。繰り返しになるが、明らかになったことは以下の三点であ

自己評価を高めている。この点で予約採用制度の周知は必要である。だが、将来の不安が予約採用への需要と効用を遠ざけているのである。

【付記】本稿作成にあたって「高校生の進路についての調査」データの使用、及び東京大学教授小林雅之氏と名城大学教授浦田広朗氏からは有益なコメントをいただいた。記して謝意を表したい。

【注】

- (1) 供給側の影響については、朴澤泰男「予約奨学金への申請と採用に対する都道府県別採用枠の効果」東京大学大学院教育学研究科大学経営政策研究センターワーキング・ペーパーを参照されたい。
- (2) 奨学金の受給自体、親の年収や学力と関連するが、ここでは二段階推定は考えないことにする。